哲學研究　第五十五號

自然の理性化（承前）

西晋一郎

五

感謝による理性化は宗教道德共通の地に導く。日日感謝して生活するは宗教と謂ふを得る。併し夫の四恩を掲げて感謝すべき方面を人生裡に區分して其に對してそれぞれ報謝すべしと說く如きは既に倫理的差別を示して居る。然るに孟子の四端の中羞惡の心は特に倫理的感情とも謂ふべきで感謝が宗教道德共通の自由界に反へらしめるに比べて其性質を異にする。コーエンは恥の感情は對他的であつて愛とか同情とかが自己感情の擴張であるとは違つて眞の意味に於ける社會的のものであることを指摘したが、面目、體面、名譽は其字義も示す通り他人、社會仲間（ナカマ）を豫想してをる所は人は何とも言へ神明の照覽に對して疚しからずといふのとやゝ趣きを異にしてをる。Ehre, honour は多分同樣の氣味ある言葉であつて全然社會的である。Ehre は自我他我對立の上に覺える情であつてリップスが Ehre の極致を他人に

構はず自らの心に於て認むる人格價値の情と見たのはEhreの社會的なることを十分に見ず從つて其人格の概念も主觀的に偏してをる。固より仰いで天に愧ちず俯して地に愧ちずなどの言葉もあれど、これも道德的地位に伴ふ感情を移して左樣に感ずるのかと思ふ。

恥づる感じの原始的なるものは生理的生活幷に其に起因する諸本能感情の發露を人の面前では恥づる傾向である。畜類は其畜生的生活を恥づる樣子はないが人間には之を超越する或者があつて、後者を自己の本來となし生物的生活に司配せらるるを恥づるので、恥づるといふ特種の感情は此超越者の自然的生活に對する自己保護的作用とも見ることを得る。恥の情は反省的である、理性に反へる情である、只自然的である禽獸と自然的にして又精神的なるべき人間とを區別する情である。此點に於て羞惡の情は既に一般的に自然を超脱せしめ、自然を理性化する作用を有し、自然の裡から精神が出現し來る端緒を示してをる。恥づるは人前を恥づるにて元來對他的であるが、特に物質的司配を受けることを恥づる。肉體的生活は勿論、其外物質欲卽金錢財貨に着するを貪欲と稱して心のきたなきものとし、淸廉潔白とは先づ財欲の汚れなきを指してをる。至て蓄財を好むものも眞相を人に看られては

恥づかしく思ふは夫の蒙求に出てをる支那の昔話にも見えてをる。又卑怯臆病を格別恥づるは肉體的恐怖を超脱する意味である。我が戀愛せる人の前では怯懦を特更恥づるとプラトーも言つてをる。恥を知るは勇に近しといふ勇は肉體超脱の意味あるものにて血氣の勇ではない。特に孟子の教訓に見えてをる通り之を失へは飢にも及ぶほどの一椀の飯も、犬猫同前に投げ與へなば乞食も怒つて去る如きは恥じの情が人間をして物質的生活を棄却せしめる情狀をよく語つてをる。

併し恥じの情は性卽ち永久の眞理又は永久の價値に反へらしめる働きをするのではあるが、此情が其原始的段階に於て一々眞理、價値に中つて働きはせぬ、此情は固より修養を要する。獨り羞惡の情のみでなく四端は皆其が情である限り多少の偏倚を免れぬことは佐齊一齊の言の通りで、所謂匹夫匹婦の溝瀆に自經する類は恥の過ぎたるものであるが武士も世間を恥づるばかりに心ならずも自己を棄却して皮相的の體面を保たんとしたる例もある。人の手前を恥づるのが其特質である羞惡は愛情、同情が自己感情の擴大であると異にして、自己に對する他人に向ふ感情であるから倫理的性質のものであるが、これが又此感情が往々自己を失はしめて徒らに他人を顧慮せしめ、それがため道德的自我の前提たるべき(「モーメント」たるべき)經驗的自

我を傷けるとある所以である。惡衣惡食を恥づる如きは反省的なるべき羞惡の情の本質から言へば夫の溝瀆に自經するよりも遙かに劣つて殆ど物質超脱作用の性質と矛盾してをるが、これは此情の對他的なるより來る弊であつて、溝瀆に自經する匹夫を貶する士人も惡衣惡食の恥は容易に之を脱せないのを見れば超脱的と發他的の兩性質中後者が比較的強いように思はれる。破衣を着けながら美衣の人と並び行きて恥ぢなかつた子路の勇は易きが如く見えて其實難いのであらう。しかし又肉體超脱の他の極端に走つて犬儒の嘲笑を蒙つたギリシャの學者の振舞は肉體物質と共に社會世間をも超脱せんとしたものであるから却て無恥に陷つた。して見れば羞惡の情の兩面とも言ふべき物質超出的と對他的社會的とは各々其適宜を得ねばならぬ、卽ち社會的なることを通じて自然を超出するのが此情の本質である。恥じが倫理的性質のものであるのは全くこれによるので、若し單に自然の超脱をのみ事とせば一切を超絶せる絶對境を說いた老莊の末流たる竹林の七賢や、犬儒の類となる恐がある。倫理の實現に努力した聖人の名敎は故に名を重んじた、必ずや名を正さんことを力めた。名は名譽である、名譽を求むるは一種の欲である、富が欲しくないのみならず名も欲しくはないものにして始めて公明正大の事が出來るとせ

ば名を以て人倫を維持せんとするは自家撞着ではなからうか。然かも聖人は名を以て人心を攪り貴賤上下の分に伴はしむるに榮辱尊卑の情を以てせしめて法度も禮儀も興したのである。大國の宰相の榮位を文繡を着せられたる犧牲と同一視した莊周の徒は之と共に國家を經綸するを得べけんも又之と共に社會を無視することも出來るわけである。天下に一二の莊周は無かるべからずであらうが天下の衆庶を導いて道德の俗に入らしめるには只欲を濟さしめることによりて欲を制する外はないのであらう。スピノザも只情のみよく情を制すと言つたが、しかも制する情と制せらるる情と同次位のものと見たのではない。若し同次位の欲を以て欲を制するならば利害の打算から來る妥協權勢を以て威壓せられ利を以て招誘せらるる似て非なる社會、其實生存競爭の生物的生活と其本質に於て違ふ所なき生活を現ずるまでであつて、自然的因果律の世界は幾たび巡ぐつて見ても依然として本との世界である、此世界から自然に自由界に通ずる路のないことは惡樹に善果の實のらぬと同じ理である。しかしスピノザが能制的情と謂つたのは既に理性を實現した所から直ちに發するものであらうから寧ろ賢哲に於て始めて見る所であつて、之を民衆に期待することは難い。聖人が民衆を化するに用ゐた情は普通一般の人情とし

て働いて然かも所謂理發卽ち理性に根ざすこと自余の限定的情と異なる情である、四端とか良知良能とか言ふものである。これ聖人の文化的事業の廣大なるを得る所以であらうと思ふ。名譽を重んずると名を惜むとは相接近し、名を惜むと恥を知るとは殆ど異名同實である。或は流れて名聞心となり或は徒らに世間の手前自己を失ふこととともなるが、其物質超脱的なると對他的社會的なるとは自然の裡に理性の曙光を見るともいふべきもので普通の欲情と其次位を異にするもの、超經驗界から經驗界に現はれ降りて自然的因果律の世界より、自由界への一路を通ずるの用をなすものといふことを得る。これを利用して欲の世界裡に理の世界を實現し、欲を濟さしめながら欲を超へしめることを得る。凡そ四端とか感謝とか敬愛とか神仙にもあらず又禽獸にもあらず兩者を兼ね具する人間に特有である情がなければ聖人と雖も自然界裡に倫理國を建てる手段がない。(此の外シルレルの說いた美的風習が道德界に吾々を導く豫備となることは聖人も夙とに認めて卽ち禮には多分の美的要素が含ませてある。しかし是は美の性質の論を俟つて明らかとなるべきである、大體美も善も自由界たるに於て相通ずる所から來る。)就中名の心と恥じの情とは相表裏するもので人生の道德化の最も大なる力であるのは其反省的反始的が

其對他的社會的を通じてであるによる、これ羞惡の心が特に倫理的であつて惻隱の心、感謝の心が宗教道德共通の世界に通ずるのと趣きを異にする點である。

六

上に述べた通り羞惡の情は情である限り義の性の端緒であるから一々眞理、價値に中つて働きはせぬ、これ孟子が之を擴充せよと說いた所以であつて、所謂其恥づる所を其恥ぢざる所に達する必要がある。されどこれはたゞ恥づる範圍を廣くするといふだけの意味ではなく、恥づべきを恥づるやうに此情を精錬修養することである。恥づるは元來何事でも恥づるのではない、禽獸と區別すべき人間の面目の感じは生物的生活に沒頭するを恥かしく思はしめる、女子は男性的勇氣なしとて必ずしも恥ぢはせぬ。恥じが對他的であるとは他に對する自己獨特の面目なきを恥づることである。體面とは自己獨特の體面である、人の目に映ずる己れ特殊の面である、自己の社會的地位である。剛强を缺くは男子の恥、柔順を缺くは女子の恥、長者に讓らざるは少年の恥、農夫の耕作を怠るは其恥、信用を失ふは商家の恥、其技に拙なるは工の恥、勇なきは軍人の最大の恥、學問なきは學者の恥である。恥づべきこと固より

多からんが其特に恥づる所は各自獨特の面目となす所にある。商賈に武勇なしとて必ずしも大なる恥辱とはせぬ、農夫に學識無きは其恥ではない、男子が多少柔順を缺いでも面目を失つたとはせぬ。羞惡の情が社會的であるとは社會に於ける地位差別に卽することである。地位差別の相關によつて社會は成るのである。面目を維持するによつて眞の意味の社會が成立する。恥を知らざるは常習犯罪者の特徵であつて、卽ち其非社會的なることを示してをる。恥無きは無責任、卽ち社會的任務に對する無感覺である。責任は職分の上にある、自己の分の上に恥じの感を銳敏ならしめるのが羞惡の情の修養である、所謂擴充である。

凡そ獨特の地位とは他の之に對する獨特の地位と對立して始めて成立するのであるから己れ獨りでは意味のないことである。向ふの獨特の地位と對立して始めて成立する自己獨特の地位を辱かしめざるのが體面である。體面は公共客觀的のものであつて己れ一人のことでない。自他の對立相關の上に成る新統一は客觀的なるものの實現である、此客觀的者の各半面を自と他の面目が代表してをるのである。他の面目を尊重するによつて自己の面目を自重することが出來る。名譽、體面の感情は抽象的個我の主張でなく、社會的秩序、社會的法則の維持者である。自他の

對立相關の上に成る自他の獨特性は社會的生活の組織卽ち法の要素であるから自他の面目を相互尊重するは法を實現することである、又は法を通じてのみ眞の自他相互尊重が可能であるといふも可である。これ卽ち人格の尊敬であつて、人格の相互認容と道德法の尊敬とはカントにあつても同一事であつたと思ふ。法の成立以前には人格といふものは無い、人格と法とは相伴つて實現せられるのである。道德の基礎としてはカントは愛情、同情を斥けて法の尊敬を本としてをるが、法の尊敬は卽ち義務の念であつて、義務の感じは人人各自の職分の感じてある、(カントの義務論が發展してフィヒテの職分論となる)、職分の感じは面目の感じである。故に羞惡の精錬せられたものは義務の念である、羞惡の心は義の端である。

面目は當人の面目であつて同時に公共的のものである、面目の感じによつて人は主觀を超へて客觀となる。職分は客觀的組織の要素であり、面目は其代表である、面目は法の代表である。面目を恥づるによつて己私に克つて法に一致することが出來る。面目を持するは自己を立てると同時に人倫を立てるのである。人の師たる體面、軍人の體面、人の夫として體面であるから自己の體面を持するは公共の道を支持する所以である。又他の一面から見れば師は弟子と、將は卒と、夫は婦と對して互

に相成るのであるから將、師、夫、が各々自己の體面を恥づるは師弟の道、將卒の道、夫婦の道といふ客觀的法を維持することである。法の實現は抽象的限定をして具體的限定たらしめる、具體的限定によつて眞に特殊なる內容が實現せられる。特殊的なる內容とは自己の意義の明確なることをいふ、自己の意義の明確は自己に對する他の意義の明確と相俟つて得られる、他の意義を認容する働きによつて自己の意義が明らかとなる。かくの如き關係は固より無限に發展してゆくものであるから眞に特殊なる內容は無限の關係を其裏に包藏すと謂ふべきである。法は無限に發展するから具體的限定も無限に進むわけである。面目の感じを經て自己獨特の職分を覺ること、自己を客觀的法に參與するもの、公共の道を實現するものと覺ることを道德的自覺と謂ふ。道德的自覺に於ては自己は最早や心理的自覺に現はれし己れ獨りの抽象我ではなく他と無二の對立相關をなすことによつて實現せられた他と共通なる公共なる一新內容、一新統一の半面である。夫といふとき只一箇孤立せる抽象的なる男子ではなく妻と共に夫妻的生活といふ公共的なるもの卽ち夫婦の道に入つて、其夫婦の道の半面卽人の夫たるものを代表する。而して夫婦の道に就て一の夫妻は他の夫妻に見るべからざる唯一の對立相關的內容を實現する。道德的自

我は固より具體的特殊の生活內容卽ち個性の實現なれど、其はいつも某といふ特定の他の一個人と唯一獨特の對立相關を成す上に現はれる。父として、子として、夫として、師として、弟子として、友人として等の如くそれ〳〵特定の某個人と獨特の相關を呈する、個性は云はゞ其等諸の特殊なる相關的生活內容の統一點である。父子、夫婦師弟、學者俗人、官民、司法官と司法の對象としての人民、賣手買手等の相關的生活は其に關係せんとする個人から見れば一種の普遍的原型的であるが、社會全體から見れば一種特殊的原型的である、所謂人倫五常とはかくの如き原型的社會關係を限定したのであるが、これは道德の素地たるべき自然的生活の性質に因由するものであるから絕對的に限定し了はることは出來ぬ、例せば勞働者資本家の對立の如き重要なるものが發達して來た。故に此等道德的原型的生活も此等の中に於てそれぞれ實現せられる道德的個人的生活も何づれも無限に進行するのである。法の進展には際限は無い。而して眞に具體的である特殊の實現とは具體的全體の實現に外ならぬから、眞の個性といふべきものは畢竟理想である、神的生活の內容のことである。現實としては個性は無限の可能性を包藏してをる。翻つて面目の感を察するに夫の道德的生活の原型の上に感ぜられ、社會的職分を辱しめざることに專らであ

る。面目の感じの最も精錬せられたものは自己の個性の發揮の上に現はれるべきであらうが、道德に於ては個性の發達は社會的職分を經由してである、原型的社會關係の上に於てである。宗教及び藝術に於ても個性の發揮が其極致であらうなれど其に入るには必ずしも君臣父子或は文武農商等の社會的職分を經由するとは限らぬ、却てすべて此等を超越して進む趣きが見える。固より個性の發現が眞の精神の實現であり、精神界こそ眞の社會的生活であるから、宗教藝術に於て現はれる個性の具體的生活は必ずや社會的職分の十全なる實行とならねばならぬ、精神的生活の深き統一は倫理的たるを失はぬ。しかし倫理の特色が善にあるといふは其が最も具體的なる自然の統一であるを意味する、此統一はカントの所謂道德法である、やゝ具體的に言へば法度典則である禮制である、コーエンの所謂法 Recht の上に倫理は立脚するのである。是れ面目の感じがあくまで職分に伴ふ所以であつて、又羞惡の心が本來倫理的なることを示してをる。義は固より仁に通ずるが、仁は宗教の境涯でもあるに比べては義は最も倫理的である。義の端が羞惡の心である。父父たり、子子たり、君君たり、臣臣たり、夫夫たり、婦婦たりといふ孔子の言は道德の特質を寸分の隙間なく言い表はしたものと思ふ。

七

自然を理性化する作用として感謝、羞惡の情について述べた、特に後者は倫理的であることを說明した。惻隱の心は仁の端なりとは如何なる意味であらうか、孔子は恕を己れ欲せざる所は人にも施す勿れと說いてをらるるが惻隱の情もつまり思ひやりといふ意味があるから恕と同類と思はれる。夫の周の公劉が自ら貨を好む所から思ひやりで其領內の民を富ましめたと孟子の言つたのは惻隱の心は仁の端なりの例話と見ることを得る。これは今日普通言ふ愛情又は同情と同じものであらうか。ヘルバルトは同情と好意 Wohlwollen とを區別して前者は只一箇の感情を反響する卽ち一箇を重ねて二重にするだけのことで何等道德的意義あることではない、反之後者は甲乙兩意志が觀念裏に明瞭に對立して其一が他に調子を合はせるので此所に意志と意志の關係卽ち道德的關係が始めて成立すると論じてをるが、當然の見解である。愛情、同情は道德的なるものとしてはスピノザ、カント既に之を斥けてをる。ホッブスの自己保存說に對して種族的感情を揭げたシャフツベリーの說もシュライエルマヘルは畢竟自利說なりと見た。ヒュームの揭げた同情は自利的な

りや利他的なりや不明なりと評せられてをる。恕といふはヘルバルトの好意のことて、他の感情を反映する同情や本能的親愛の情と區別すべきである。愛情の原始的のものは犢を甜めるの愛であつて、犬猫の其乳兒を育てるとき乳兒は只已身の一部分、已身と同體である乳兒をいたはるのは我身をいたはるのである、母子の對立は無い。すべて本能には主客對立がない、卽ち眞に主といふものが現はれてをらぬ。普通認識に於ても認識主觀は認識對象に依存するから、眞の主から見れば客たるを免れぬ。恕は卽ち眞に主客を對立せしめる媒介作用をなすものであつて、此所から眞の主卽ち精神が現はれて來る。親子の愛、男女の愛、鄕國の愛、一般の友情卽ち社交性、禽獸草木の愛等すべて本能は愛情の形で現はれ、此等の本能は人生の大原動力で道德の主要なる內容となるものであるが、只道德の素地といふべきて、之を理性化して始めて道德的生活となるべきである。一切の自然的愛情は主客未だ分れざるときの自我の擴張に過ぎぬ。之を直ちに私情とは謂ふべからざれど私情となり得るものである。ベンサムが同情を矢張り自己の快樂を求むる情と別ならずと見て立法制裁の上にのみ道德の出現を認めたのは彼自身の見地からは明らかに道德と自然との別を立てたのである。未開人の血族的群居に於てすべて財產といはるべきも

のは悉く部落有であつて私有といふものがないのが通例であるが、しかも彼等に是れ汝の有なりやと問へば然りと答へ、是れ部落の有なりやと問ふも亦然りと答へる、つまり部落と已身と未だ眞に分れてをらぬから從つて所有についても部落有と私有との別がない。之を私有に對する共產なりと思ふべきでない、私有共有未分の態である。此原始的狀態が個人の絕對的私有の非眞なるを語ると同時に私有を全然不正と見る共產主義も偏したもの、偏したるは卽ち非眞なることを語つてをる。未分混沌の態は自己限定によつて主客自他に分れても更に高い意味の統一によつて原狀を保留する所がなければ抽象に陷るのである。共產主義も私產主義も主義として主張するのは抽象である。抽象的個人主義に陷いれるものはうぶな本能に反省すべきである。母子一體の本能、男女の情、血族種族一體、民族一體の本能に戻つて見れば今日獨立の一箇の我と考へてをるものは昔日家族種族とのわけめを知らなかつた我である。クリツフォルドが「種族我」に本づいて道德を立論したのは功利說の抽象論に對しては實に謂はれのある論旨である。只種族我は本能的自我であるから之を精神化するでなければ種族の我に陷りて不道德ともなり得る。科學的智識盛んとなり目的手段の連絡を求むる應用的悟性の發達した方から見れば、自然的本

能に立ち戻らす必要がある。社會學に於ても類意識といふ如き淡泊なる抽象的の感じを社會結合の主力と見ずして、色彩濃厚なる生き〳〵としたる上述の諸本能をこそ社會的進動の原力と見るべきである。コントが智と共に家族的愛情を以て社會の二大原動力と見たのは社會に於ける統一原理と分化原理の並行を洞察したものて、社會學も其開祖に反省すべき點がある。アドラーが家庭に於ける女子の愛を宇宙の統一原理の象徴の如くに言つてをる旨は深い。しかし固より自然主義の文學の如くに本能に止まるのは他の極端である。

八

ヘーゲルの所謂市民的社會を轉じて國家となすは抽象的限定を具體的限定となすことて、ここに自然を超へて眞の文化が現はれる。惻隱の情を擴充するは卽ち此轉化作用の一である、惻隱の情を擴充するは卽ち恕のことて、己を推して人に及ぼすのである。是は他人の感情が波及して我が內に同樣の感情が生起する自然的心理的進動とは似て非なるもので、己を推しで人に及ぼす純粹活動である。己れ達せんと欲して人を達し、己れの欲せざる所を人に施さざる客觀的統一の作用である。ヘル

バルトの所謂意志と意志との關係である、此關係卽ち統一によつて意志を成すのである。すべて此方の位置を去らずに先方を見たのでは半面の見方である、抽象である。此方から先方を見ると共に又位置を轉じて先方から此方を見た所如何をも考へて始めて其關係の全相が分かる、具體的となる。卽ち始めて此方と先方、我と彼が同時に知れる。我が位置のみから見た彼は彼の眞相でない、彼の眞相を知らねば我の眞相も知れぬのである。我の眞相とは我が自己であること、情神であることである、彼を自己と認むる働きによつて自ら自己なるを知る。精神は具體的客觀的である、自然は抽象的主觀的である。自己中心で物を見、人を見る間は自己はまだ自然物で、自己でない。恕は自己を轉ぜしむるもの、自他統一の本に還らしめるものである、此反省的の情によつて我によつて彼を知り彼によつて我を知るの知を興こすのである。此意味に於て道德は知である、あくまで理性的である。四端とか感謝とか良知良能とか稱するものは所謂理發である、理性から發するもの、理性に反省せしめるもの、理性的感情、カントの純粹感情である。四端とは性卽理の端緒である。恕は客觀的統一の作用であつて同情に於て見ゆる統一とは段階を異にしてをる。此作用を懇切に說いたのは孔子の子に求むる所を以て父に事ふる能はず云々の言と大學

に絜矩の道として示してある所である。大學に、上に惡む所以て下を使ふ勿れ、下に惡む所以て上に事ふる勿れ、前に惡む所以て後に先たつ勿れ、後に惡む所以て前に從ふ勿れ、右に惡む所以て左に交る勿れ、左に惡む所以て右に交る勿れ、此を絜矩の道と謂ふとある。之を單なる愛情又は同情と混同すべきでない。絜矩の道は社會の根本原理と謂ふを得る、自然的本能的社會又は所謂市民的社會（ビユルガーリツヘゲセルシヤフト）を轉して道德的社會又は國家となすもの、自然を變して文化を作り歷史を現はすもの、夷を變じて華となすものである。眞の社會の奧底には絜矩の道が流れてをる、國家組織の裏には理性が潛んでをる。天國の主は全智全德の大靈であり、理想國の君主は哲人であり、先王の政治は德を本とし德は實踐的理性の統一に因る。今日社會問題を論ずるものも結局社會の奧底は最上の睿智なるを認めねばならぬことと思ふ。ラッセルの社會改造論が宗敎に究極してをるのもアドラーが所謂三段の尊敬を說くのも曾てヘーゲルがエンチクロペディーの末段に宗敎道德が國家の骨髓であるを說いた主旨と何の相違があるであらう。而して絜矩の道は其一面を語つたものである。しかも具體的眞理に於ては一面は卽ち全相であるといふことを得る。

惻隱の擴充、恕、絜矩の道によつて本能と自然は悉く精神化する。本能は己れある

を知つて他あるを知らぬ、親子の本能で兒を愛するは己れが身を愛するのである、男女本能的に相求むるは己れの欲望滿足の道具として向ふを見てをるのである。向ふを自然物とのみ見るものは自らも自然物である。すべて本能はアン、ジェには對立を含んでをる、親子相對し、男女相對し、個體は種族に對し、飢は食に渴は飲に對する、つまり其對象なければ本能もない。されど此對立の意義を知らざるは眞に主客相對せざるからである。契矩の道によつて眞に上下左右が對立する、相關的一體となる。父子について見れば既に父といふこれ子を裏に含む、子の無い所に父は無い。既に子といふこれ父を裏に含む、父なき所に子は無い。一を失へは他も從て失い、一を擧ぐれば他も從て擧がる。父子にして一圓とは是である。一方ばかりでは物を成さない。故に父を全くするは卽ち子を全くするので、子を全くするは父を全くするのである。一圓を成すとは融合無差別となるのではなく、却て父は益々父、子は益々子といふように各其特殊を現はして始めて一圓の實が擧がる。子とは何ぞ、父を思い、父のために盡すこれ子の子たる所である。父にあつても同前である。切に父たるを自覺するとは子を全くせんとすること、切に子たるを自覺するとは卽ち父を全くせんとすることで、二者離れては二者共に成らず、二者合して二者は益々二つで

ある。一體なる故はつきり分れ、はつきり分れるから一圓を成す、これ相關的一體である。若し路傍の人の如くに互に相關せずとならばこれ父にもあらず子にもあらず父子の對立はない、從て父子一體もない。本能は父と自知せず、父子の對立を覺らず(卽ち對立せず)。然るに人倫は分を知るに初まる。此知なくしては眞に倫理は成立せぬ。本能は無差別的一體である、是は私にも轉じ得る、子の愛に溺れる所から親の分に背き其他さま〳〵の不道德をも現はす。猶男女の本能は夫婦の道を現んずる素地であるが、種々の不倫も此から生ずる。倫理は之に反して分を知るに初まる、これによつて私を轉じて公となすことを得る。以上の經過は惡によつて行はれる、卽ち子に求むる所を以て父に事へ父に求むる所を以て子に臨めば子たるの分、父たるの分を知るのである。其子に求むる所を以て父に事ふる所に一身の便宜を否定する作用が含まれてをる、恕がかかる否定をなさしめるのである。かかる否定によつて達したる父子一圓であるから父子の相關は客觀的である。これ吾老を老とするは天下の老を老とする所以、我子を愛するは凡そ人の子たるものを愛る所以であつて、畜類が、各々其兒を養はんとして互に噬み合ふのと違ふ。相關一體の父子は父子の道といふ公共的なるものの實現である、かかるものとして自ら知るを道德的自覺

といふべきである。此自覺に就ては自我は自然のままの自我でなく却て之を超出して一新統一の上に現はれた自我である。恐によつて父のためにする所におのづから自然的自己が否定せられてをる。此否定の上に成る統一に達して始めて父子の本能の意義を知る、父子の理を知る。

父子の相關一體によつて父子の道德成ると同樣に男女の本能は男女對立卽一體に轉じて夫婦の人倫成る。夫といふとき夫の分(其は卽ち婦に對する自己の特定の意義)、婦といふとき婦の分(其は卽ち夫に對する自己の特定の意義)を知つて互に他のためにすべき所あるを示してをる、故に此裏には自己感情の滿足をのみ求むる本能の否定といふべきものが含まれてをる。此否定の上に成る統一に達して始めて男女本能の意義を知る、卽ち夫婦の道を知る。夫婦の道の裡には社會存續の責任といふことが籠つてをる。夫婦はかくて天下公共であつて私の關係でない。只兩人の幸福のためのみと考へるは誤つてをる。一女子が婦道を操るは天下の婦道を維持する意味がある。家を出でずして敎を國に成するのである。一女子を犯すは法を犯すことであるから許されないのである。すべて某の個人が自己の職分を盡し又は怠るは一般的に職分を維持し又は傷つける意味がある、これ職分は現實的には某

々個人の現實的行爲範圍のことなれど其意味に於ては公共一般的であるからである。

右と同樣の經過によつて民族的本能から一面忠君愛國の道德、一面民利民福を實現する道德が成る。かく道德化せる民族的生活は絜矩の道によつて他の民族に對するから自己の君國に忠なるは凡そ世界万國に忠なる所以である。万國の忠臣、愛國者は互に知己であり、万國の賢君は互に握手する。是れ國際的生存競爭の生物的生活を脱出して國際的道德を興し人道を實現する唯一の道であると思ふ。この理の端緒は曾て既にシユライエルマヘルが認めて居る。論じて此に來れば怨によつて進むと羞惡から進むと遂に一致することを見る。恥づるは體面を恥づるので、一家は他家に對して其體面を保たんとし、一國は他國に對して其體面を辱しめざらんとする。しかも他の體面を尊重する働きそのものが自家の體面を尊ぶ所以であることを知れば人道平和の道は國々互に其特殊の面目を發揮して相敬愛するに外ならぬ。人道とは國際的道德のことでなければならぬ、卽ち國々相對立することによつて現はれる統一でなければならぬ。

理發的、理性に反省せしめる的の情として感謝、羞惡、惻隱の情が自然を理性化卽ち精神化する。此等の情を無視しては道德文化を語ることは出來ぬ。自然的にして同時に理性的である人間に特有である此等の情があればこそ本來 (an sich) 理性的である自然が自己の本來を覺ること卽ち精神となることが出來る。精神が眞に客觀的なるものである、精神は相關的一體、對立卽一體の自覺である、卽ち精神は關係的のものである、關係的のものが眞の實在である。精神とは精しく言へは精神對精神である、人格とは人格對人格である、人格とは相關的のものである。此相關は無限に進むものである、無限の相關に入るから人格、精神となる。精神は無限性を抱く、無限性を藏してしかも具體的特定の內容を實現するとき、具體的特定の內容を實現することによつて無限性に與かるとき精神、人格となる。此無限に發展する相關が法である、舜法を天下に爲すといふ法である、禮制である、道德的秩序である。故に法が眞實在である、英米の倫理は通例法を以て衆個人の福祉、完成を實現するに必要なる社會生活の統制樣式と見て、個人が實在で法は只手段とするのであるが同一の眞理

九

を抽象的に見ると具體的に見るとの相違である。理性的感情の力によつて抽象的個我は法に入る、カントと雖も尊敬の感情を假らずしては道德法のみによつて決定せらるる善き意志の實現を說くことは出來なかつた。法に入るには已私は否定せられねばならぬ。陸象山の所謂私意一關を經ざれば德に入らず、德に入らざれば典則法度の意義を知らぬのである。德と法とは相表裏してをる、プラトーの國家論卽德論なる所以、アリストテレスの倫理學が國家學(ポリチックス)の精髓なる所以、トマス、アクイナスの德論法論並行する所以がある。法は精神對精神の世界である、社會的である、社會的が眞實在である。文化とは法の行はれることとて、法が最も具體的なる自然の統一である、最も具體的なる自然の統一で眞に一貫である、卽ち歷史である。宗敎も藝術も道德的秩序外に實現せられることはないと思ふ。自然の深き統一は倫理的である。

自然と本能は精神にまで實現せられて其本來の意味を見る、精神にまで實現せられるとは最も直接的に卽ち最も深く統一せられることである、最も全體的に統一せられることである。全體から見たとき物は其眞意味が明らかとなる、其理が明らかとなる、理性といふ言葉で全體的統一を表はす所以である。故に全體卽ち眞實在は

意味である、理である。意味卽ち理は相關的のものである、相關の上に獨立自全が成り、唯一特殊が現はれる。唯一特殊とは蓋し外に出でて彼我の內容を比べた言葉で、獨立自全とは內に自ら主となつた境涯であらう。後者なるが故に特殊ながら無限と自由である、若し單に特殊の內容といふのみならば自ら安んずべき謂はれなきに似てをる。かく特殊とは意味のことである、自然として見れば吾人の如何なる行動も生理的心理的一般の法則に還元せられぬものはない、自然法に洩れるものはない。意味の象徵として見られるとき一般的法則に司配せられる自然が悉く特殊の色合を帶びる、生理的心理的法則で說明し盡すことの出來ぬ神彩を現はす、共通に使用せられる能樂の假面が個性を表情する。宗敎の眼には山河大地は精神の一大象徵であるであらう、陽明の所謂淸輝を發するといふことであらう。ここに自然は其本來の實在性を回復して眞に活きて來る。一切の本能は道德に於て眞の滿足を得る、卽ち其本來の意味に達する、男女の本能は夫婦に於て社交性は朋友の道に於て民族的本能は國家に於て其眞意味を實現する。衣食住一切の經濟的生活、一切の物質的文明は人格的關係に統一せられて活きて來る、精神のみが眞に活きてをる。工場に於ける機械の運轉は感謝の言葉、耕作は敬愛の象徵、官廳の執務は廉恥の表現とも謂ふべ

く、汽船の航し電車の走るは忠恕の流行でなければならぬ、かくして始めて文化と稱することを得る。固より是は文化、精神の働きと獨立に自然法に從つて人が行動し社會の經濟的組織が起り、後者を只精神が自己の表現と見るに過ぎぬといふのではない。若しそれならば曾て腦髓自動器(オートマトンセチリイ)說が生理作用は意識作用と全然獨立に生體を保持し意識は只其に伴ふ副現象、其を反映するまでのものであつて、生活を實際上毫も左右せざるものと見たと同樣の謬見となる。精神とは自然の直接的統一そのものである、自然の進路を左右する自由なるものである、自然的自我ならば右に歩んだのであらうに精神は左に歩ましめることがある、物質的文明ならば西に鐵道を敷いたであらうに文化は東に之を敷かしめることがある。いづ方に歩むも生理的法則に洩れずいづ方に敷くも機械的法則に從ふ外ないのであるが、此等の法則諸共に自然を提げて理に從つて意味に從つて形ちの世界を創造してゆく。右手を擧ぐるか左手を擧ぐるか、が精神の端的である、空に架するか地を穿つかに意味が閃めく、此機微を看るものは只精神自身である、只內面からのみ見ることを得る。自然界裡に自由國、目的國はかくの如くして建てられてゆく。カントが(第一批判哲學叢書版四七六頁以下十數頁)くどく說いてをる自由と自然的必然の關係も畢竟右の如く見る外

はない、しかしカントの言葉は一切の自然が一面自然的必然一面自由であるかのやうにも聞こえるが、本能と道德、自然と文化は別天地である、道德文化に於てのみ自然が自由の表章である。

感謝は情である、孝は性卽理である。羞惡は情である、義は性卽理である。惻隱は情である、仁は性卽理である。情と性の會點は德である、孝德、仁德、義德である。性卽理は永久眞理である、情は時間的經驗的である。德が眞の意味に於ける現實である、時間的と永久的との會點、有限と無限の接觸、アリストテレスの所謂生滅するものと不朽なるものとの一致である。德が眞の自我である、內外の一致である。所謂誠は內外を合する道である、內外合一、心身一體が德である、眞心が具體的精神である。誠は永久眞理にあらず、經驗的存在にあらず意味卽實在の具體的現實である。佐齋一齊の所謂情は現象、性は本體であれば德に於て現象卽本體である。張橫渠が心は性情を兼ぬと謂つた心はヘーゲルの現實でなければならぬ。伊藤仁齋は只德は認めて性卽理を空想としたのは現實は捉へたが現實は只永久眞理によつて立つことを見

てをらぬ、活動を說いたが活動の奥は靜であることを見なかつた。既に道德の發展といふこれ直ぐに万古の道德を指示してをる。万古不易の道德を見ずして道德の發展をいふは只是れ空言であつて何の意義も無い。万古不易の仁義卽ち仁義の性、仁義の理なくして仁義の德の修養實現は不可能そのものである。孝の理なくして感謝何處から發すべきか、仁義の性なくして惻隱羞惡何處から現はるべきか。夫れ永遠の色なければ如何にして紅綠を識別せん、永遠の聲なくして如何にして風聲水音を辨ぜん。一切の知覺が直ちに本具永久の觀念の嚴として在るを指示する。知るとは何ぞ、覺とるは何ぞ、それと知りそれと覺とることではないか、それとは何ぞ己れのことではないか、本とからの己れなくして何の知、何の覺あるを得べき。一切の感覺知覺は皆記憶ではなからうか。プラトーの憶起說もライブニッツの本具觀念說も殆ど自明的の眞理であるではなからうか。眞の意味に於て循環するものは只意識ではなからうが、記憶は卽ち循環である、記憶卽ち意識である、記憶なればこそ意味がある、一意識は一意味である。我が屋と識るは故郷に歸つたからである、聲と識り色と識るは万古聲色の故郷に歸るからではなからうか、聲色の故郷に還つたのが聲色の意識ではなからうか。意識は皆反省ではなからうか。意識を意識し反省を

反省して寸隙ないのが意識の徹底卽ち精神である。このとき松に古今の色は無く、このとき仁義は悠久でなければならぬ、このときイデアの不滅界に還へるのである。意識の弛緩微弱はイデア界から遠ざかるのである、次第に其影と爲るのである、幽かなる憶起である。ベルグソンは創造的進化を說いて宇宙の內容を永久に完結せるものと見たフイヒテの晩年の思想を日新を許さざる世界觀として斥けたれど、時間的に新に創造せられ發展しゆく一切內容は無始無終に神に具はるではなからうが、アダムの一生と其人となりと其子孫の生涯は委曲を盡くして神の裡に万古具はるとライプニッツは認め、しかも其は吾人の自由と何等矛盾するなき旨を說いてをる。創造、發展、實現を說く理想主義哲學も其等の原理として永久の價値、意味を見てをる。冲漠無朕万象森然已具とはかかる意味であらうかと思ふ。万象すら森然として天地以前に既に具はる、忠孝仁義夫婦の道師弟の道朋友の道一切の道德一切の法は万古でなければならぬ。（完）

本稿前號拙稿分の末尾に（完）とありしは（未完）の誤植につき著者及讀者に謝してこれを訂正す（編輯委員）